

説教 『驚くべき赦し』
聖書 詩編 130：1～4／ヨハネ福音書 21：15～17

「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐ええましょう。しかし、赦しはあなたのもとにあり、人はあなたを恐れ敬うのです(詩編 130:3~4)。「罪」とは何か、「赦し」とは何か。

「罪」が法や道德律で規定されることは古代も現代も同じなのだが、律法は民の心と暮らしにぐっと食い込んでいる。聖書を読んでいて「罪、罪となぜそんなに神経質になるのかね」と思うことがあるが、律法は人間を厳しく見つめて甘くないので、「赦し」の有無が不可欠なのだ。「主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください(130:2)」と切実に願うほど、「赦し」の主体は神にある。世論や時代状況の変化で、きつくなったり、緩くなったりはしない。

復活したイエスはペトロに現れ、彼の名を呼び、「わたしを愛しているか(21:15,16,17)」と三度も尋ねた。はっきりと「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存知です(21:15,16)」と答えているのに、さらに尋ねられてペトロは「悲しくなった(21:17)」。なぜ悲しくなったのか。「愛している」ことが信用されていない、と思ったのか。イエスのことを「知らない(18:25,27)」と否定することが咎められている、と思ったからか。ペトロは、復活したイエスの真意を量りかねていた。

「わたしを愛しているか」と問いに「はい」と答えると、イエスは「私の羊を飼いなさい(21:15,16,17)」と三度命じた。羊飼いであるイエス。「羊飼いは自分の名を呼んで連れ出す(10:3)」。ペトロは「ヨハネの子シモン(21:15,16,17)」と名を三度も呼ばれ、「よろしく頼むぞ」といった調子で、羊飼いとしての使命を託された。挫折と失敗をくり返したペトロにこそ、イエスはこれを託す。「名(その者の実情)」を呼び、ペトロのみっともない姿を「然り」とし、具体的に重要な数多の羊を飼う使命を託した。

ペトロは率直に行動し、多く罪を犯し、多く傷ついた。かつてイエスは、香油を注ぎかけた女をこう評価した。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない(ルカ 7:47)」。イエスはペトロを幾度も赦し、幾度も名を呼び、彼の愛を確かめ、御自分の使命を託した。多く赦される者に、多くを求めておられるように見える。某かの能力に対する期待ではない。挫折し、罪とその赦しを自覚する無力な私たちに、「よろしく頼むぞ」と念を押しておられるのだ。図らずもイエスに「信頼」されている私たちは、これを断れるだろうか。

三度同じことを問われたペトロは、「悲しくなった。そして言った。[主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます](ヨハネ 21:17)」と叫ぶように答えた。復活したキリスト・イエスを前にして、私たちも自分を繕うことはできない。ペトロはみっともなく堕ち、そのどん底で赦され、キリストの愛の力で立ち上がり、仕える者にされた。

私たちも惨めさに沈められたままでないばかりか、赦され、自分を隠さずに精一杯応える者となる。そしてキリストの仕事を「よろしく頼むぞ」と託される。キリストへの私たちの愛や信仰心を凌いで、キリストが私たちを信頼して下さっている驚くべき赦し。もうこれは、神の愛としか言いようがない。



《おまけのひとつ》

人は 真っ黒や真っ白ではないにせよ 灰色諧調のどこかに位置づけられるのか 否 月並みな氷山の 譬えのごとく 海上の輝く起伏に対応して その海中には数十倍の 罪深く 暗い山がある